

## 説教と文学のはざままで

——中世「説教学」(*Ars Praedicandi*) と *The Pardoner's Tale*——

海 老 久 人

Chaucer の *Pardoner* が批評家の手で分析をくわえられるようになって丁度百年が過ぎようとしている。その間に、二論文——1940年に G. G. Sedgewick が発表した論文 “The Progress of Chaucer's *Pardoner*, 1880-1940”<sup>1</sup> と1970年に J. Halverson が発表した論文 “Chaucer's *Pardoner* and the Progress of Criticism”<sup>2</sup>——が Chaucer の *Pardoner* に関する批評史を私達に提供し、そしてさまざまな問題点を跡づけて整理しようとした。しかし二人が “progress” と銘打った通史は本当に問題を解決済みになっているだろうか。皮肉なことに、多くの批評家がカンタベリー寺院への巡礼に参加している巡礼者の誰れにもましてこの *Pardoner* に魅了されて「ことばについての議論」(*pugnus verborum*) (『ティモテオへの前の手紙』六章四節)<sup>3</sup> を展開してきた。これから問題にしようとしている中世「説教学」(*Ars Praedicandi*) と *Pardoner* との関係についていえば、G. L. Kittredge が一つのヒントを与え<sup>4</sup>、C. O. Chapman が一つのモデルを示し<sup>5</sup>、Nancy Owen がさらに修正をほどこした *The Pardoner's Prologue and Tale* の構造上の問題は<sup>6</sup>、彼等の意図とは逆に *Pardoner* が「説教学」から学んだことを過少に評価させるという結果になり未解決の論点を残している。Halverson が、「かつては重要な議論の主題であったけれども、今では一つの論点としては立ち消えになりつつある」と言った中世「説教学」と *Pardoner* との正確な対応関係は依然として古くて新しい問題である<sup>7</sup>。

## I 中世「説教学」と Pardoner——構造について

従来争点は、「説教学」の構造理論と *The Pardoner's Prologue and Tale* の構造との正確な対応関係であった。Kittredge の分析を踏襲した Chapman は、「説教学」の構造理論を適用して、Pardoner のうちに同一性をさぐろうとした<sup>8</sup>。彼の分析に従えば、(1)ラテン語による聖句 *Radix malorum est Cupiditas* (『ティモテオへの前の手紙』六章十節)の主題 (theme)——333-4, 425-6, (2)主題につづく祈りは欠落, (3)「準主題」(prelocution, protheme)——483-660, (4)たとえ話 (*exemplum*)——661-894, (5)説教の総括——895-903である。Owen は、さらにファブリオ論を合成させて、上の分類を細分化している。(1)主題——329-34, (2)「準主題」(protheme)——335-422, (3)主題への再言及——423-26, (4)主題の紹介——427-62, (5)「原理」(principles)——463-660, (6)たとえ話——661-894, (7)総括——895-915, (8)祝福——916-18<sup>10</sup>。こうした対応関係にみられる図式化は、Pardoner が本来かかえている疑わしい人格と彼の「説教」との間にある亀裂をかえって深めているようにみえる。つまり、Sedgewick が “Flanders Heresy” と呼んでいる<sup>11</sup> “In Flandres whilom was a compaignye” (463) に始まり “These riotours thre of whiche I telle” (661) と語りつかれてゆく物語のなかにある唐突な脱線、そして Kittredge が “a very paroxysm of agonized sincerity”<sup>12</sup> と呼んでいる “And lo, sires, thus I preche...” (915ff.) の口調の突然の変化は中世「説教学」で論じられている整然とした説教の構造を否定するのに十分である<sup>13</sup>。Pardoner の「説教」に首尾一貫した筋の運びがないことが、H. B. Hinckley 以来 C. Brown によって論じられているように、*The Pardoner's Tale* は Parson によって語られるべきだったという見解を生む結果となる<sup>14</sup>。又、こうした筋の運びの稚拙さは Pardoner の性格の「散漫さ」(looseness) からくるのであり、この意味では話し手と *The*

*Pardoner's Tale* は一致している、といった乱暴な見解まで生む結果となった<sup>15</sup>。こうして *The Pardoner's Prologue and Tale* に『中世説教集』 (*Middle English Sermons*, MS. Royal 18 B xxiii) に収録されている説教<sup>16</sup>や高名な説教家 John Mirk と同じ説教<sup>17</sup>を期待する聴衆は結局裏切られざるをえない。Chaucer の Pardoner は、当代の Robert of Basevorn, Thomas Waleys, Henry of Hess, Higden といった「説教学」の理論家ではなく、なによりも一人の実践的巡回説教家である。いろいろな町や村で聴衆・平信徒を相手に語りかけられた彼の「説教」は経験によって学ばれたものである。それは彼一流の説教理論によってのみ支えられている。いうなれば、当代の「説教学」が示している説教上の諸規定・諸作法を意識的に再編成してゆくことによって、彼にしか話せない独自の「説教」を聞かせてくれる。彼の手腕はこの再編成のうちにこそ見いだされなければならない。次に、中世「説教学」の理論と Pardoner の「説教」との相違をみたい。

「説教学」の方法上の原理は使徒パウロによって与えられている。彼によれば、「私のことばと宣教は、人を屈服させる知恵の雄弁ではなく、霊とみいつのあらわれ」であり、「十字架のことば」を語ることはそれ自体が「ことばの知恵」と「この世の知恵」とを超えたカリスマを内在していることになる<sup>18</sup>。そして使徒パウロが誰れよりもよく知っていた「語るべきことは何か」という主題は、中世になって修辞学 (*ars rhetorica*) をとり入れることによって一層その意味を鮮明にすることが出来るのである<sup>19</sup>。12世紀になって登場した「説教学」の理論家達が目指したのは、単に聖書に示されている神の言葉の「何」を語るのかという問題だけでなく、「いかにして」語れば効果的になるかという問題に方法論的基盤を与えることであった。Henry of Hess は『説教学』とは何か」という命題について簡潔に答えている、「説教学とは何か或ることがらについて或ることがらを語るための方法を教えてくれる学問である。この学問の主題は神の

言葉である。」<sup>20</sup>

中世「説教学」が示す説教上の構造は、いわば理論家の数だけ存在するといっても言い過ぎではない<sup>21</sup>。それ故、ここでは便宜上、Margaret Jennings がその最大公約数を求めて整理した“‘Typical’ Ars Praedicandi”の図式に従っておこう。

#### I. CHOICE OF THEME

- A. Congruent to matter and time of sermon
- B. Taken from Scripture
- C. Sufficiently long to accommodate divisions

#### II. PROTHEME OR ANTETHEME

- A. Similar to, same as, or related to principal theme
- B. Culminating in prayer for grace

#### III. INTRODUCTION OF THEME

- A. By narration
- B. By argumentation

#### IV. DIVISION OF THEME

- A. Separation of theme by various modes into several principal parts
- B. Confirming or adducing “authorities” for these parts
  - 1. Use of concordance
  - 2. Use of rhetorical colours

#### V. SUBDIVISION OF THEME

(Similar procedure to division of theme)

#### VI. DILATION OR EXTENSION OF VARIOUS SERMON PARTS

- A. By “confirmations” and rational arguments
- B. By exempla, commentary, application

この図式を *Pardoner* に適用すれば次の図式になる。

<p>I. CHOICE OF THEME</p> <p style="padding-left: 2em;">B. Taken from Scripture</p>	<p>(My theme is alwey oon, and evere was—<i>Radix malorum est Cupiditas.</i> (333-4)</p> <p>Therefore my theme is yet, and evere was, <i>Radix malorum est Cupiditas.</i> (425-6)</p>
<p>IV. DIVISION OF THEME</p> <p style="padding-left: 2em;">A. Separation of theme</p> <p style="padding-left: 2em;">B. Confirming</p>	<p>(Lo, how that dronken Looth, unkynedly. . . But, sires, now wol I telle forth my tale. (485-660)</p>
<p>VI. DILATION OR EXTENSION OF VARIOUS SERMON PARTS</p> <p style="padding-left: 2em;">B. By exempla</p>	<p>(In Flaundes whilom was a compaignye. . . That luxurie is in wyn and dronkeness. (463-484)</p> <p>These riotoures thre of whiche I telle. . . And eek the false empysonere also. (661-894)</p>

このあとに「説教」を締めくくる総括が 895-915 行と続く。上の図式からわかるように、*Pardoner* の「説教」は説教のあるべき構造から極端にかけ離れ、改竄の跡が著しい。その特徴は、全体の行数のバランスからくらべると、VI. DILATION OR EXTENSION に相当する部分が異常に長いことである。彼は一種の逆ピラミッド形をした説教の構造を聴衆に思い描かせるように仕組んでいる<sup>23</sup>。彼は *Prologue* の中で、彼の「説教」が正統な説教から逸脱したものとなることを二度にわたって念を押している。

I preche so as ye han herd befoore,  
And telle an hundred *false japes* more. (393-4)

と

Thanne telle I hem *ensample* many oon  
of olde stories long tyme agoon. (435-6) [*Italics mine*]

彼自身が、自分の説教が今日残されている中世イギリスの説教にみられるような無個性な説教とは違うことを一番よく知っている<sup>24</sup>。

Chaucer の Pardoner が中世「説教学」の教える模範に挑戦するのは、なによりも彼が経験の人（この意味では、wife of Bath がもう一人の重要な経験の人であるのと同じである）<sup>25</sup> であり、聴衆が何を求め、何を喜ぶのかを知っているからである。たとえどのような批判が「説教学」の理論家から起きようとも、彼は彼の「説教」を説き（sermone, 879）つづけるのである。次に、“false japes”とも“ensample”とも呼ばれている *The Pardoner's Tale* のうち、特に、463-894行を問題にしてみたい。

## II 「たとえ話」(exemplum, ensampull) と *The Pardoner's Tale*

「聖ベーダは『イギリス史』の中でいっています。むかし、イギリスがまだ信仰を持たなかった頃のこと、教皇はかの地へ一人のとても有能で学識のある僧を派遣いたしました。説教の中で彼はたいそう巧妙で耳新しいことどもを織り交ぜて話しました。でも、結局のところ彼の説教は何の实りもありませんでした。そこで、もうひとり別の僧が派遣されました。この人は前の人ほど学識にすぐれているというわけではありませんが、説教をする時には物語やじょうずなたとえ話を使いました。そしてしばらくいたしますとこの人はイギリスのほとんどのひとたちを改宗させたのです。」

上の文章は中世イギリスに広く説教家の間に流布しよく知られていた例話集 *Alphabetum Narrationum* の英語版 *An Alphabet of Tales* の中で「じょうずなたとえ話は巧妙な説教以上に多くのことを教える」(*Exemplum bonum plus monet quam predicacio subtilis*) という標題のついた一つの挿話である<sup>26</sup>。ここには「説教学」による「たとえ話」の機能に関するさまざまなわずらわしい制約をまぬがれて、「たとえ話」のたのしきとか効用とかが端的に表現されている。もちろん、Chaucer の Pardoner

もこの僧とおなじように、「物語」や「たとえ話」が人々の耳を引きつけることを心得ている、「連中にむかしむかしの古くからある物語のたとえ話を沢山話してやるんだ。だって学問のない連中はむかし話があったてお気に入りだし、こんな話だと自分達でも話せるし、まるごとおぼえたりできるからね。」<sup>27</sup> 聴衆である私達は、彼の魂胆が「金品を得ることであって、決してひとさまの罪を匡正することではない」<sup>28</sup> ことに用心しなければならないが、その一方彼が「人々を『貧欲の罪』に墮ちることをとどめ、いたく罪を悔い改めさせ」<sup>29</sup>、そして「彼等を敬虔の念に駆りたてる」<sup>30</sup>ための「じょうずなたとえ話」(*exemplum bonum*)の効果をよく知っていたことは彼の業績<sup>31</sup>からして確実なことである。ここでは、まず、中世「説教」が「たとえ話」にどのような機能を持たせているのかをみてみたい。

元来、「たとえ話」(*exemplum*)はアリストテレスが用いた古代修辞学の一つの用語で、「典拠として挿入された物語」を意味していた<sup>32</sup>。中世においては、イエズス・キリストが「たとえをもって多くの事をお教えになった」<sup>33</sup>という故事にならって、神学上の教義を人々にわかりやすく解き明かすための「道徳的挿話」の総称であった<sup>34</sup>。そこには聖書に直接取材した挿話、聖者伝、アーサー王などの英雄伝、罪を犯した聖職者の話、動物譚に自然科学の知識といった具合に、その内容は多種多様である。説教家は待降節や復活祭の聖節が近づいてくると、どのような説教を話して聞かせようかといろいろな構想を練り、聖書の傍らにおかれた *Alphabetum*, *Gesta Romanorum* や *Tabula Exemplorum* といった例話集の頁をくり、そのなかから適当と思う「たとえ話」を説教の中に挿入していったのである<sup>35</sup>。

Robert of Basevorn によれば、「たとえ話」は(1)「自然のたとえ話」(*examples in nature*)、(2)「人工のたとえ話」(*example in art*)、(3)「歴史上のたとえ話」(*historical example*)の3種類に分けられ、説教の主題を紹介するために用いられる「装飾」(*ornament*)であると考えられている。

る<sup>36</sup>。又、Alexander of Ashby と Thomas of Todi によれば、主題として使われている言葉をいくつかの部分に細分した後 (division, subdivision), それぞれの各部を「証明」(proof, confirming) したり「敷衍、拡大」(extension) するために用いられている<sup>37</sup>。このようにみると、「説教」の正統な構造理論からすれば、「たとえ話」は説教全体のなかでは補助的機能を持っているにすぎない。具体的に一つのモデルを示すために『中世説教集』から「一体誰れが平安を祈念しにゆこうか?」(“*Quis ibit ad rogandum pro pace?*”) を主題とした説教をとりあげてみよう:

I. CHOICE OF THEME——“*Quis ibit ad rogandum pro pace?*”

Jeremie iij. (206 / 30-207 / 19)

A.——206 / 31-34.

B.——206 / 35.

C.——207 / 1-19.

II. PROTHEME OR ANTHETHEME——(207 / 20-208 / 5).

A.——207 / 20-208 / 4.

B.——208 / 4-5. (Pater Noster and Ave)

III. INTRODUCTION OF THEME——(208 / 6-13).

A. } 説教の主題をもう一度くり返す。  
B. }

IV. DIVISION OF THEME——(208 / 14-213 / 2).

ここで、説教家は、「物語や自然と歴史上のたとえ話」(be story and also be ensampull of kende and also of gestes, [208 / 16-18]) によって三つの罪を解き明かす。

A[I]—「傲慢の罪」(þe synne of pride in lyvying,  
[208 / 14-6])

B[I]—(a)教父クリソストモスの言葉が典拠として挿入。(For Crisostomus sey..., [208 / 18-23])

(b) 「自然のたとえ話」として「花や実が木の上の方にあれば激しい風でも吹くとすぐにゆれて下におちてしまう」というたとえ話が語られ、『イエレミアの書』によって証明される。(Ensampull in keend. . . , [208 / 24-31])

(c) 『ローマ史』 (*Gesta Romanorum*) に取材した皇帝ガイウス (Gaius the emperour of Rome) の挿話<sup>86</sup>。(Also I rede in cronisis Romanorum. . . , [208 / 32-209 / 4])

1. 皇帝ガイウスの寓意的解釈がなされる。(Now goostely to speke. . . , [209 / 5-12])

2. 『ヨブの書』による証明。(209 / 13-16)

(d) もう一つの「たとえ話」として『ダニエルの書』に取材したバルタッサル王 (Baltasar þe kyng) の挿話。(Also liknes in figure. . . , [209 / 17-23])

「傲慢の罪」の結論— (209 / 24-32)

A[II]—「貧欲の罪」 (vnlefull couetyng, [209 / 33-210 / 5])

B[II]—(a) 『非公認教会法』 (þe lawe canon, Extravagancium) と使徒パウロの言葉が典拠として挿入。(210 / 6-20)

(b) 『ドノ・ティモリスの書』 (Libro de Dono Timoris) から悔い改めを拒否した男の話。(Acordynge to þis matur I fynde a tale. . . , [210 / 21-211 / 5])

(c) 『歴代の書下』に取材したオズィア王 (Azarias kyng of Israel and of Ierusalem) 追放の話が「たとえ話」として語られ (Figure here-of I rede. . . ), 『第二法の書』からの言葉が典拠として加えられる。(211 / 6-21)

(d) 「金持ちとラザロのたとえ」 (Ensampull de diuite et lazaro, Luce[xvj]) が簡単に挿入される。(211 / 22)

「貧欲の罪」の結論— (211 / 23-29)

A[III]—「肉欲の罪」 (*liffe in fleshly lust and likynge after is flesshe*, [211 / 30-212 / 2])

B[III]—(a)ヒラリウス (*þe grett clerke Hillarius*) の言葉が典拠として挿入。(212 / 2-8)

(b)「自然のたとえ話」として網にかかった鳥の話が語られる。  
(*Ensample in keend...*, [212 / 9-16])

(c) 歴史上の事件として、フルゲンシウス (*þe grett clerke Fulgencius*) の書物から取材したヘラクターレースとたたかったアンタエイオス (*Anteus*) の話が語られる。(Quarto patet in *re gesta...*, [212 / 17-26])

「傲慢の罪」, 「貧欲の罪」, 「肉欲の罪」の総括— (212 / 27-213 / 2)

#### V. SUBDIVISION OF THEME—(213 / 3-214 / 8)

A[I]—「柔和」 (*mekenes of herte*) の勧め。(213 / 3-11)

A[II]—「愛と義」 (*charite and rightwisnes*) の勧め。(213 / 12-30)

A[III]—「清純」 (*clennese*) の勧め。(213 / 31-214 / 8)

説教の終わり—*Qui cum Patre et Filio et Spiritu Sancto regnat, Deus per infitatem.* (214 / 9-18)

上の構造によって「たとえ話」がどのように使われるかという一応の輪郭がわかるだろう。そして、この説教のなかで注目しておきたいのは、写本の欄外の余白に書き込まれた“*Exemplum*” (208 / 27), “*De Gaio imperatore*” (208 / 34), “*Figura de Baltasar*” (209 / 17), “*Narracio contra cupiditatem*” (210 / 25), “*Exemplum*” (212 / 9) といったラテン語が、いわゆる「道徳的挿話」として総称された「たとえ話」の挿入個所を明記していることである<sup>39</sup>。この説教のモデルからわかるように、説教全体の中で「たとえ話」が持つ機能は「証明」であり、時には意味を

「敷衍拡大」することである。主題にたいして補助的機能を果たすことが正統な「説教」の模範にかなっている。そして、一つ一つの「たとえ話」は相互に何ら必然的脈絡を必要としていない。先の説教を例にとれば、IV. A [I] 「傲慢の罪」に附随している(a), (b), (c), (d)の各挿話の間には何のつながりもないことがわかる。累積的に、説教家は必要な「たとえ話」を各「例話集」から必要な分量だけを次々と説教の中に組み込んでゆくのである。こうした「例話集」は中世の説教家及び知識人にとっては共有財産であって、彼等はそこにちりばめられた「たとえ話」を自分勝手に脚色したり改竄することを夢想だにしなかった。ところが Chaucer の Pardoner は、伝統的に説教の主題の脇役にしかすぎなかった「たとえ話」を大胆にも一挙に主役の座におしたてて、表舞台に登場させるのである。

『悪ノ根ハ、金ヘノ執心デアル』(*Radix malorum est Cupiditas*)<sup>40</sup>を主題とした彼の「説教」はその開幕から (“In Flaundes whilom was a compaignye” [463]) もう既に「たとえ話」の中で常套的に用いられる手法である。たとえば、『中世説教集』の中で欄外の余白に “Narracio” というラテン語が書き込まれている個所にも同じような手法が用いられている, “For as I rede, þer was somtyme a clerke of Ynglond, and lered in Parrysche, in Fraunce, but lad euyl is liffe and was a synnefull a wreche as euer anny might be...” (176 / 11-13) 又, Pardoner の「説教」では三人のフランダースの放蕩連中が話の縦糸を織りなしている。性格描写には少しもの足りなさが残るものの、彼等三人は主体的な役割を持っているし、相互に内的連関を持っているプロットの中で生きてゆくように仕組まれている。この点で、Pardoner の「説教」は大きく伝統から逸脱している。

伝統的な説教の中でしばしば応用される「釈義」(exegesis) に従えば、Pardoner の三人の放蕩者 (Thise riotours thre, 661) は「貧欲の罪」 (“glotony”—485-588), 「賭博の罪」 (“hasardye”—589-628), 「偽り

の誓いの罪」(“othes false and grete”—629-660)の三つの罪のうちに寓意的な意味をさぐり当てられることになる。仲間Aは〈貧欲〉氏、仲間Bは〈賭博〉氏、仲間Cは〈偽りの誓い〉氏といった寓意化が試みられるが、彼等の役割はそれまでであって、それ以上の展開はない。例えば、『中世説教集』の或る説教家は、三人の友人を積義して次のようにいっている。

Now goostely to speke to oure purpose, first frend...it is þe world. . . .

The second frend... þat is is fadere and is modere, is breþur and is sustren, is wiff and is children. But what frenshippe shewe þise vn-to hym?

The iij frend at comme to mankeend is þe dewell. . . (87 / 24-88 / 22)

しかしフランダースの三人の放蕩者の場合、これら三つの罪はプロットが展開していく過程でアイロニーの効果を生むように組み込まれている<sup>41</sup>。

又、Pardoner の場合、寓意——例えば“Croked wey”(761)は〈罪へ至る道〉を暗示し、“that grove”(762)は〈恐怖と神秘〉<sup>42</sup>、とか〈罪ある闇〉(『ヨハネの第一の手紙』一章五節)を暗示する——はむしろ全体の中ではかなり後退して、遠景を描いている程度にしかすぎない、何度も言及され擬人化された「死」(Deeth, 675, 699, 710, 727, 753, 761, 772)はモチーフとしては重要でありこの「説教」の核にはなっているけれども、実際に表舞台に登場してくることはない。単純な「善玉対悪玉」、「美德対悪徳」といった構図から脱けだして、フランダースの三人の放蕩者は「反逆者たる『死』の殺害」(sleen this traytour Deeth, 699)というモチーフが与えられて彼等の行動に内的必然性をもたせることになる。そしてこのモチーフを核として、その周辺をとり囲んでいる情況描写や脇役描写は多元的構造をもち、緊張感と一種独特な恐怖の世界をつくり出してい

る。

夜明けを告げる筈の教会の鐘にかわって、三人の放蕩者が実際に耳にした死者を弔う野辺送りの鐘は (664-5)、この「説教」全体を覆っている『死をおもえ』 (*memento mori*)<sup>43</sup> の響きに呼応して恐怖の世界を聞き手の想像力に訴えるのにふさわしい合図である。猖獗をきわめた「黒死病」 (*this pestilence*, 679) の蔓延によって死そのものが日常化し、死といつても隣り合わせている状態の中で、為すすべもなく茫然としている人々の目にとって死はなまなましい実体をもつものとして映ったとしても不思議ではない<sup>44</sup>。そこでは死は「鎌」 (*sperre*, 677) を手にして「人目をはばかる盗人」 (*privy thief*, 675) であり、「敵」 (*adversarie*, 682) であり、「反逆者」 (*traytour*, 699, 753) である。「あの人は突然一夜のうちにやられちゃったんだ」 (*sudeynly he was ys slain to-night*, 673) という運命は居酒屋の主人にも、そこで働いている給仕役の子供にも、三人の放蕩者にも、そしてもちろんこの「説教」を聞いている聴衆にとっても他人事ではない<sup>45</sup>。それ故に、「敵」としての「死」からわが身を守らなければならないという切迫感は至極当然な『『死』の殺害』へのモチーフであった。彼等三人の放蕩者は一種の全人類、もしくは全イギリス国民の代理人という使命感のもとにこのモチーフを自ら担ってゆくのである。

こうして『『死』の殺害』にでかけた三人の放蕩者は途中で顔だけのぞかせて (*al forwrapped save thy face*, 718)、現代人にとっても依然正体不明の無気味な老人と出会う。(711ff.) 身元調査は別として、この老人の最も重要な役割は新しく変容を遂げた「死」をプロットに導入したことである。つまり三人の放蕩者が目指していた「死」は黒死病による死であったはずである。一方、老人が森の木の下に置き去りにし、三人に指示した「死」は「8ブシユルのきらきらするフロリン金貨」 (*Of floryns fyne of gold ycoyned rounde / Wel ny an eighte bussshels*, 770-1) である。Pardoner がくりかえして約束していた『悪ノ根ハ、金ヘノ執心デアル』

という説教の主題はこの老人によって本来の軌道に乗せられることになる。

「死」がもつ多様な変容に気が付かないまま、フロリン金貨のまばゆさに目がくらんだ三人は当面の敵であった「死」を忘れてしまう。「もう彼等は『死』を追い求めることはやめた。」(No lenger thanne after Deeth they soughte, 772) もう一人の「われらが敵、悪魔」(the feend, oure enemy, 844) が三人の心のうちに忍び込んで「『死』の殺害」のモチーフは新しい局面を迎えてゆく。「金への執心」が彼等みづからの「死」を招来するという運命へと転換する。三人のうち年上の二人が一番年若い方を剣で殺害することを計画し、一番若い方は他の二人を毒殺するための陰謀をめぐらす。こうして「『死』の殺害」のモチーフは「『死』によって殺害」されるという逆説によって三人の放蕩者の話を完了させるのである。

中世における伝統的な説教が語る「たとえ話」が構造上相互に何の連関もなく、幾つかの断片が寄せ集められているものにくらべると、Pardonerの「たとえ話」では、三人の放蕩者を主人公にして、居酒屋の亭主、給仕役の子供、老人、そして一番年若い放蕩者に毒を調合してやった薬剤師を含めた登場人物は全て「『死』の殺害」というモチーフによって一貫した物語性を備えられている。こうした点において、彼の「たとえ話」は手段としてではなく、それ自体で自己完結して聞き手に道徳的判断を委ねるのである。

#### エピローグ

*The Padoner's Tale* は、途中で妨げられた *The Tale of Thopas* などとは違って、最後まで確かに聴衆の耳をひきつけてきた。終結部で三人の放蕩者が犯した<sup>おどま</sup>悍しい罪の数々を一気に告発して彼の「説教」は閉じられる。(895-915) ところが915行で突然彼の口調は変わり、元の「罪深い」(vicious, 459) 聖遺物の売人に戻ってしまう。この突然の変化は「言葉と行為」との一致こそがよき教師のあるべき姿であると説くパウロの教えに

対する違背である<sup>46</sup>。このことに最も敏感に気がついたのはこの巡礼行の統率者である the Host その人であった。つまり、「言葉」巧みな Pardoner は、それに「行為」が伴わなかった故に手痛いしっぺ返しを受けなければならない運命にある。こうして詩人 Chaucer は中世「説教」の伝統から大きく逸脱した *The Pardoner's Tale* に強いたがをはめ、秩序を維持しようとする。これが Chaucer の生きていた時代を投射した *The Canterbury Tales* の世界であるならば、確かにそこには強い保守的秩序観が存在する。しかし、私達は、Pardoner の罪は罪としても依然その背後で彼の口を操る Chaucer の技量に新しい文学的志向が働いている、と考えてみないわけにはゆかない。

J. A. Burrow によれば、Chaucer も含めた「リチャード王朝期の詩人」はスコラ哲学の余韻が残る分析の時代に生きていたという<sup>47</sup>。中世「説教」における説教の構造理論を支える精神風土もこうした時代精神とわかちがたく結び合わされている。そこには厳然とした秩序への志向が働いている。この秩序の中にあって、「たとえ話」は時代の道徳的、宗教的信条の奴隷であり、又既存の思想 (*idées reçues*) を隷属的に証明する役割以上のものではない<sup>48</sup>。Chaucer の *The Canterbury Tales* においても、一番最後に Parson がいみじくも巡礼者一同に諭した「拙僧につくり話をさせようとしてもだめだ」という警告はこの既存の思想への回帰を強く促すものである。しかし、Chaucer が示している秩序観の強い規制にもかかわらず、Pardoner は旧来の「たとえ話」を補助的機能、もしくは隷属状態から解放放とうとしている。現代の評価基準クリテリオンからみると、こうした Chaucer の試みのなかに、これまでの秩序とは異質な新しい文学への衝動がほのみえてくるのである。

#### 注

- 1 G. G. Sedgewick, "The Progress of Chaucer's Pardoner, 1880-1940," *Chaucer: Modern Essays in Criticism*, ed. E. Wagenknecht (Oxford: Oxford University Press, 1959), pp. 126-158.

- 2 John Halverson, "Chaucer's Pardoner and the Progress of Criticism," *CR*, IV (1970), 184-202.
- 3 聖書の日本語訳はすべて、『口語訳旧約新約聖書』（東京：ドン・ボスコ社、1970年）によった。
- 4 G. L. Kittredge, *Chaucer and His Poetry* (Cambridge: Harvard University Press, 1972), p. 21.
- 5 C. O. Chapman, "The Pardoner's Tale: A Medieval Sermon," *MLN*, XLI (1926), 506-509, and "Chaucer on Preachers and Preaching," *PMLA*, XLIV (1929), 178-185.
- 6 N. H. Owen, "The Pardoner's Introduction, Prologue, and Tale: Sermon and *Fabliau*," *JEGP*, LXVI (1967), 541-549.
- 7 J. Halverson, *op. cit.*, p. 184.
- 8 C. O. Chapman, *op. cit.*, p. 508.
- 9 Chaucer からの引用はすべて、F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford University Press, 1975) によった。
- 10 N. H. Owen, *op. cit.*, pp. 543-544.
- 11 G. G. Sedgewick, *op. cit.*, p. 132.
- 12 G. L. Kittredge, *op. cit.*, p. 217.
- 13 多くの批評家が *The Pardoner's Tale* を中世説教の系譜に入れることをためらっている。Cf. G. G. Sedgewick, *op. cit.*, p. 133; Susan Gallick, "A Look at Chaucer and His Preachers," *Speculum*, 1 (1975), 467; E. J. Howard, *Geoffrey Chaucer* (London: The Macmillan Press Ltd, 1976), p. 161; J. J. Murphy, "A New Look at Chaucer and the Rhetoricians," *RES*, XV (1964), 20 n. 1; and R. O. Payne, "Chaucer's Realization of Himself as Rhetor," *Medieval Eloquence*, ed. J. J. Murphy (Berkeley: University of California Press, 1978), p. 274.
- 14 Cf. H. R. Hinckley, *Note on Chaucer* (New York: Haskell House, 1964), pp. 157-159; and Carlton Brown (ed.), *Chaucer, The Pardoner's Tale* (Oxford: At the Clarendon Press, 1970), pp. xii-xvii.
- 15 J. Halverson, *op. cit.*, pp. 184-185.
- 16 『中世説教集』からの引用はすべて、W. O. Ross (ed.), *Middle English Sermons* Edited From British Museum MS. Royal 18 B. xxii (London: Oxford University Press, 1940, E. E. T. S. O. S. no. 209) によった。なお、頁数と行数の表記方法は便宜上、頁/行（例えば、206/30であれば206頁の30行を示す）という方法をとった。

- 17 Theodor Erbe (ed.), *Mirk's Festial: A Collection of Homilies, Johannes Mirkus (John Mirk)* (London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1905, E. E. T. S. E. S. no. 96).
- 18 『コリント人への前の手紙』一章一二章.
- 19 J. J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages: A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance* (Berkeley: University of California Press, 1974), 280 ff..
- 20 “Ars praedicandi est scientia docens de aliquo aliquid dicere. Subiectum artis illius est verbum Dei. (The Art of Preaching is the science which teaches how to say something about something. The subject of this art is the Word of God.)” (Harry Caplan, *Of Eloquence: Studies in Ancient and Medieval Rhetoric* [Ithaca: Cornell University Press, 1970], p. 143.)
- 21 *Ibid.*, 146 ff.; Robert of Basevorn, *The Form of Preaching* translated by L. Krul (*Three Medieval Rhetorical Arts* [ed.] J. J. Murphy [Berkeley: University of California Press, 1971],), 133 ff.; J. J. Murphy, *op. cit.*, “Chapter VI,” pp. 269-355. 中世「説教」研究者が素描している説教の構造については、H. Caplan, *ibid.*, pp. 57-72; G. R. Owst, *Preaching in Medieval England* (New York: Russell & Russell Inc., 1965), 316-324; W. O. Ross (ed.), *op. cit.*, xliii ff..
- 22 Margaret Jennings, C. S. J., “The *Ars componendi sermones* of Ranulph Higden,” *Medieval Eloquence*, ed. J. J. Murphy (Berkeley: University of California Press, 1978), pp. 125-126.
- 23 Cf. *ibid.*, p. 124.
- 24 一般的に中世の説教は個性、つまり説教家の特質を表にだすことはなかった。 Cf. G. R. Owst, *Literature and Pulpit in Medieval England* (Oxford: Basil Blackwell, 1966), p. 155; W. O. Ross (ed.), *op. cit.*, lxii-lxiii; S. Gallick, *op. cit.*, pp. 458-459.
- 25 Wife of Bath が自分の過去の結婚生活を基に長い説教をし、Pardoner から “Ye been a noble prechour in this cas” と呼ばれている。 (*The Wife of Bath's Prologue*, 165)
- 26 Mrs. M. M. Banks (ed.), *An Alphabet of Tales* (London: Kegan Paul, Trench, Trübner, 1904, E. E. T. S. O. S. no. 126), p. 217:  
 Saynt Bede tellis in ‘Gestis Anglorum’ how, when Englonð/ was oute  
 of þe belefe, þe pope sente in-to it to preche a bissshop þat/ was a passing  
 sutell clerk, & a well-letterd; and he vsid so mekull/ soteltie & strange

- saying in his sermons, þat his prechyng owder/ litle profettid or nocht.  
 And þan þer was sent a noder þat was les/ of connyng of literature þan  
 he was, & he vsid talis & gude exsample/ in his sermon; and he with-in  
 a while conuertyd nere-hand all Englund.
- 27 *The Pardoner's Prologue*, ll. 435-438.
- 28 *Ibid.*, ll. 403-404, l. 461.
- 29 *Ibid.*, ll. 430-431.
- 30 *Ibid.*, l. 346.
- 31 *Ibid.*, ll. 389-390: "By this gaude have I wonne, yeer by yeer,/ An hundred mark sith I was pardoner"; and *General Prologue*, ll. 703-704: "Upon a day he gat hym moore moneye/ Than that the person gat in monethes tweye".
- 32 E. R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, translated by W. R. Trask (New York: Princeton University Press, 1967), pp. 59-60.
- 33 『マルコによる聖福音書』四章二節
- 34 E. R. Curtius, *op. cit.*, p. 61, n. 75.
- 35 まだ活字文化が発達していなかった時代にあつて、説教家達は説教用の高価な手引書を手元に所有していたらしい。Cf. H. G. Pfander, "The Medieval Friars and Some Alphabetical Reference-Books for Sermons," *Medium Aevum*, iii (1934), pp. 19-29. 「例話集」については、G. R. Owst, *Preaching in Medieval England*, *op. cit.*, 299 ff.. Chaucer がどのような「例話集」を利用したかについては、K. O. Petersen, *On the Sources of The Nonne Prestes Tale* (New York: Haskell House, 1966), p. 97, n. 3.
- 36 Robert of Basevorn, *op. cit.*, pp. 154-156.
- 37 J. J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages*, *op. cit.*, p. 313, p. 340.
- 38 皇帝ガイウスの挿話は実際には *Gesta Romanorum* には記述がない。このことは *Gesta Romanorum* が非常に広く流布し、知られていたためにかえってルーズに言及されたのであろう。Cf. W. O. Ross (ed.), *op. cit.*, pp. 361-362.
- 39 *Middle English Sermons* の中では他に "Fabula" や "Nota" が書き込まれているし、John Mirk の説教では一種の教訓を引き出すために最後に "narracio" が来る。Cf. S. J. Kahrl, "Allegory in Practice: A Study of Narrative Styles in Medieval Exempla," *MP*, LXIII (1965), 108, n. 19.
- 40 ラテン語聖書にある *omnium* は省略されているので、日本語訳でも「スベテ」に当る箇所は省略した。
- 41 まず「貧欲の罪」は、[彼等三人の話が居酒屋で酒を飲んでいる、いわゆる

- “Tavern Scene” で始まっている(663)。フロリン金貨を見つけた後には、彼等の目的は “In myrthe and joliftee oure lyf to lyvet” (780, 833) と変わる。更に一番年若い方は殺害計画を実行に移すために “Now lat us sitte and drynke, and make us merie” (883) と誘いをかける。二番目の「賭博の罪」は三人のうちの誰れが町へ食料買い出しに行くかを決める時 “the cut” を引き、これをきっかけに二人対一人が相互に殺害の計画を立てることになり (793 ff.), “pleye at dees” (834) が彼等の人生の目的となる。三番目の「偽りの誓いの罪」は 692, 695, 701, 708-709, 757, 782, 840, 843, 860 といった各行で頻繁に犯されている。
- 42 森が中世の人々にとって何であったのかについては堀米庸三編、『中世の森の中で』(生活の世界歴史 6; 河出書房新社, 昭和50年), 13-29頁を参照のこと。
- 43 抽稿, 「*The Pardoner's Tale* における Irony—'Bigiled is the giler'」『主流』36号 (同志社大学英文学会, 1974年), 71-73頁。
- 44 中世は *memento mori, ars moriendi*, “Danse Macabre” をモチーフとして『死』を視覚化させたおびただしい絵画, 木版画。彫刻にあふれている。Cf. T. S. R. Boase, *Death in the Middle Ages* (London: Thames and Hudson, 1972); Ernst and Johanna Lehner, *Devils, Death and Damnation* (New York: Dover Publications, Inc., 1971); and Hans Holbein the Younger, *The Dance of Death* (New York: Dover Publication, Inc., 1971).
- 45 *The Pardoner's Tale*, l. 682, ll. 690-691.
- 46 Cf. F. V. Cespedes, “Chaucer's Pardoner and Preaching,” *ELH*, XLIV (1966), 1-18. 及び, 斎藤勇著, 『中世のイギリス文学—聖書との接点を求めて』(東京: 南雲堂, 1978年) 237-243頁。
- 47 J. A. Burrow, *Ricardian Poetry* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 82.
- 48 *Ibid.*, p. 83.
- 49 *The Parson's Prologue*, l. 31.